福音新聞
THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110～120周年
標　語
共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日　第3種郵便物認可（毎月一日発行）
2020年8月1日（土）第797号
発行所　福音新聞社（1部100円）
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人/趙 永 哲・編集人/金 柄 鎬
印刷所　青丘文化社

〈2020年 在日大韓基督教会･日本基督教団〉
平和メッセージ

在日大韓基督教会　総 会 長　趙　永　哲
日 本 基 督 教 団　総会議長　石橋　秀雄

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し…十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」（エフェソ２：14、16）

日本基督教団と在日大韓基督教会は、1984年に宣教協約を締結してから36年の歴史を神に導かれて歩んできました。わたしたちを結びあわせる主イエス・キリストは、十字架を通して敵意という隔ての壁を取り壊し、二つのものを一つにしてくださいました。わたしたちは、主イエス・キリストこそ和解と平和の主であることを信じ、2020年の平和メッセージを表明いたします。

＜新型コロナウイルス感染拡大について＞

新型コロナウイルス感染症が世界の脅威となり、日本においても事態が深刻化しています。今この時も、ウイルス感染による痛みや悲しみを覚えておられる方々、悩みと不安の中にある方々の上に、主なる神の慰めと平安をお祈りいたします。

新型コロナウイルス感染症によって、社会も、教会も、関係学校、関係団体も試練の中にあります。礼拝を中止せざるをえなかった教会、重症化が心配される高齢信徒の礼拝出席の自粛を求めるなど、大きな痛みの中で礼拝をささげている教会があります。また、両教会において、全国的集会や総会の中止・延期等も余儀なくされています。しかし、この大きな試練の中で「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。」（ヤコブの手紙１章２節）との御言葉が示されました。どのような試練の中にも神の恵みに満たされて「この上ない喜び」となるとの御言葉に励まされています。すでに、教会では様々な工夫や取り組みが進められています。日本基督教団と在日大韓基督教会の全国の教会が、祈り合い、この大きな試練の中で、神の恵みを受け、喜びに満たされて礼拝をささげ、神の御栄光を現わすことができればと祈っています。

＜外国人ヘイト問題について＞

新型コロナウイルスの感染リスクに社会が脅かされる中で、外国人に対するヘイトスピーチなどの人権侵害がもたらされています。この度、外国人とかかわりのある特定の事業所に対し、「日本キリスト教団」の名を不当に用いた外国人ヘイト文書が送られたことが判明しました。理不尽な憎悪をあらわにした文書によって、どれほど深い痛みと傷がもたらされたかを思うと心が痛みます。被害に遭われた方々に慰めと癒しを切に祈ります。

わたしたちは、すべての人の命を贖うキリストへの信仰に基づき、「すべての人と平和に暮らしなさい。」（ローマの信徒への手紙12章18節）との御言葉に従って、差別のない社会が実現することを願い祈り、そのための愛による働きにあずかることを志しています。緊張と不安に満ちた今日の状況の中でこそ、社会の中で弱い立場に置かれた人々が守られ、支えられなければなりません。社会の動揺に乗じたあらゆるヘイトに反対し、この社会に生きるすべての人々の人権が守られるべきことを改めて表明します。

＜在日外国人政策について＞

新型コロナウイルス感染拡大により、各教会、学校、施設においても、この状況下での活動に苦闘しておられること、その労力の多大なことは想像に難くありません。日本に在住する外国人、移住労働者たちへの差別が顕在化していることが報じられています。「自粛」を「要請」しながら生存に必要な「保障」を出し渋り、弱くされているところにさらなる圧迫と危機を与え続けるという差別的事態が広がっています。

この状況下で特に根深い差別意識と排外的政策によって引き起こされている出来事のほんの一断片であっても、連続して共有し続け、それぞれの宣教における祈りと支援の連帯を喚起していきたいと思います。

＜人種差別問題について＞

アメリカで白人警察官による黒人男性死亡事件が起きました。聖書には、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記１章27節）とあります。人種差別は、その人間の尊厳、霊的な部分を深く傷つける罪に他なりません。一日も早く、このような愚かな行為が世界から根絶されるよう、わたしたちは祈りと行動を共にして行きます。

わたしたちの教会は今、地球を席巻する過酷なグローバル経済の下で、激変していく社会にあって、この世に遣わされたキリストの体なる教会として、寄留者を歓待の精神で迎えながら、単にナショナルな教会ではなく、移民排斥・マイノリティ排除に抗して、寄留者が招き入れられる「神の家族」（エフェソの信徒への手紙２章19節）として改革されて行くことが求められています。それは同時に、教会自体が今から次の時代へと、頭なる主イエス・キリストによって生かされ、遣わされ、用いられる道であると考えます。

特集　新型コロナ19の感染危機と教会礼拝現状

関東地方会　西新井教会

金容昭牧師

３月から主日礼拝以外の行事を中止し、礼拝の聖歌隊の讃美も取りやめました。ロビーにアルコールジェルとマスクを設置し、礼拝中のマスク着用、礼拝堂の扉の開放、距離を開けての着席を推奨し礼拝を守りました。しかし３月29日から自宅にネット環境がなくスマホも契約していない数名を除き、主日礼拝を各家庭にて守ることになりました。

LINEアプリを利用し、土曜日に週報を、また、主日の礼拝直前に説教の動画と祈りの課題を配信しました。加えて、平日は聖書の御言葉とディボーションのためのひと言を添えて配信しました。

西新井教会は韓国語が第一言語の信徒と日本語が第一言語の信徒の比率がほぼ50%ずつなので、以前は通訳を介さず両言語を用いた主日礼拝を守っていましたが、６月７日より三密を避けるため韓国語礼拝と日本語礼拝に分けて礼拝を守っています。

一日も早く再びすべての信徒が共に集い、自由に礼拝を献げることができる日が来ますことをお祈りいたします。

中部地方会　岡崎教会

許光渉牧師

コロナウイルスの拡散によって社会的な不安と警戒が高まっている中、３月８日に諸職会を開き、２週間教会でのすべての集会やプログラムを中止し、主日礼拝を家庭で捧げることにしました。

２週後の３月22日、諸職会を開き、各信徒が属する地域や職場での新型コロナウイルスへの対応と２週間実施した家庭礼拝に対して意見を分かち合って、家庭での礼拝が困難な少数の信徒たちのために現場礼拝と家庭礼拝を並行することにしました。

４月19日、諸職会を開き、教会の財政状況やコロナウイルスへの状況での礼拝について意見を交わしました。これにより主日礼拝のライブ放送や現場礼拝時に準拠すべき事項などを決定し、今はそれぞれの健康や状況に応じて、現場礼拝とライブ放送を通じて礼拝しています。

現在、通常の1/2程度の信徒たちが教会での現場礼拝に参加していて、教会での礼拝中にはすべてのドアを開放して、手の消毒やマスクの着用、座席間に一定の距離を置くことなどを義務にしています。

中部地方会　長野教会

崔和植牧師

3月第一主日から食事と午後礼拝を中止しました。3月8日主日からは全信者マスク着用と社会的距離と手消毒を施行しました。緊急事態宣言が出された後の4月11日（土）教会近所の商店街で感染者が生じ、12日イースター主日からカカオトークのライブトークでオンライ礼拝とオフライン礼拝を捧げ始めました。多くの信者が参加できませんでしたが、簡素な礼拝を捧げ、イエス様の復活を喜び迎えました。２週間は早朝祈祷会から始め、水曜礼拝、金曜祈祷会を中止し、主日礼拝は諸職員を中心にしました。

緊急事態宣言が終わってもオンライ礼拝とオフライン礼拝をしていますが、愛餐会がないためCS・学生青年の集まりや、毎週行っている伝道も難しくなりました。財政的にも昨年より50%以上減りました。このような状況で、新型コロナが収束することを祈りながら日々働いています。

関西地方会　和歌山第一教会

朴成均牧師

和歌山地域は比較的コロナ感染者数が少なく、拡散への取り組みが早かったため、礼拝（日曜、水曜、早天、教会学校）は、休まずに行うことができました。参加できない方には、LINE、カカオトークで音声説教を送ります。

また、メールで安否確認をしています。いつもより、良い交わりをしています。

日曜の礼拝時は、マスク着用・アルコール指洗浄・一定の距離を励行しています。健康が優れない方、ご年配の方、幼児を持つ親などは、自発的に家庭礼拝を捧げ、平日に電話やメールで連絡をとっています。

現在の礼拝出席人数は、約25名です。昼食は中止していますが、毎週、野菜などの提供があり、感謝して分配し合っています。感謝すべきことは、コロナ禍の中でも信徒の方々が、信仰の面において成熟されたという点です。

関西地方会　大阪西成教会

金武士牧師

３月からは昼食を、４月からは午後礼拝を中止しています。水曜礼拝は４月末から６月初めまで休みにしました。４月26日と５月３日の主日は、週報と説教原稿を信徒の家庭に届け、教会では牧師と長老、勧士の10名ほどで主日礼拝を守り、あとは各家庭で礼拝を守るようにしました。

４月19日の午前の主日礼拝から礼拝時間を30～40分程度に短縮し、説教の同時通訳（通常は第１主日だけ韓国語→日本語、それ以外は日本語→韓国語）も中止し、説教は日本語だけで行っています。聖歌隊も復活節礼拝の後はずっと休みにしてきましたが、７月末からは、聖歌隊員の１～２名の独唱か重唱の形で再開しました。教会学校も生徒数が少ないですが、６月からは通常の形で行われています。

主日礼拝は密閉・密集・密接を極力避けるため４階の礼拝堂と５階の集会場に分散し、マスクの着用と手指のアルコール液消毒を徹底してもらっています。

高齢者を礼拝にお誘いすることや、礼拝を休みがちな信徒の訪問や連絡は、コロナウィルス感染に対する不安を配慮し控えています。信徒の交わりが弱まることが心配です。

西部地方会　神戸東部教会

韓承哲牧師

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、３月８日(主日)～５月31日(主日)まで信徒の安全と健康を守るため自粛しつつ、主日午前礼拝は礼拝規模を縮小し、基本的に少人数(35名程度)で捧げ、主日午後礼拝と主日学校礼拝は当面の間中止しました。そして、教会に出席できない信徒たちのため、『YouTube のライブ配信(生放送)』を始めました。クラスターの発生可能性のない早天・水曜・金曜の夜の祈り会はそのまま捧げています。

６月７日（主日）から自粛ではなく、自ら教会で主日礼拝をささげたい信徒は教会に集まって礼拝をささげ、３密対策として主日礼拝を午前礼拝（人数制限50名以下）午後礼拝(人数制限50名以下)・２Fモニター礼拝・自宅でのライブ礼拝に分散して捧げています。教会堂への礼拝参加は一回に限定し（午前礼拝か　午後礼拝か)、聖歌隊は休み、聖餐式を取りやめました。

主日学校は６月14日（主日）から礼拝を始めました。一日も早く全信徒が自由に教会に集い、共に交わりながら礼拝をささげる日を期待しつつ、お祈り致します。

西南地方会　小倉教会

朱 文 洪 牧 師

3月下旬から主日礼拝のみ行い、緊急事態発令により復活節礼拝（4月12日）から5月10日まで家庭にて礼拝を守ることにし、礼拝用しおりを発送。教会は無会衆礼拝となりました。現在は三密に注意を図りながら主日礼拝のみを行っています。

地域の求道者、旅行客姿は遠ざかりました。高齢者、公共交通機関利用者は自粛が続き、礼拝出席者は半分程。「新しい酒」「古い革袋」（マタイ福音書9/17）を吟味する日々です。コロナ19により文明の大転換期に入ったようです。経済発展、組織成長、無限消費神話が崩れ、自然環境保存、各分野の連帯と相生を求める社会へと変わるでしょう。外出自粛と貧富格差により人間関係が希薄になり、鬱、孤独死、自死、家庭崩壊、ヘイトスピーチ等は増加するでしょう。宣教／伝道の起点を教会（堂）から現場に置き、「呼び集める」から「地域へ拡散」する共同体を真剣に考える時かも知れません。財政は志がある信徒の維持献金制度と外部連帯献金が有効だと思います。

大阪教会　黄文錫、金恵栄長老将立

沈順花勧士就任式や名誉推戴式も

今年で教会創立99周年を迎えた大阪教会において、去る７月12日（主日）、黄文錫、金恵栄長老の将立、沈順花勧士の就任、定年で隠退を迎えた金秀男、金道栄名誉長老推戴、文仙伊、金英子名誉勧士推戴、金明憲、梁徳會、梁昌訓、李正幸、金聖愛、朴貴子、尹重悦名誉執事推戴式が盛大に行われた。

礼拝は堂会長の鄭然元牧師の司会のもとに開会され、総会長の趙永哲牧師による「イエス様に従うこと」（マタイ16：23～24）という題の説教があった。

長老将立式は、関西地方会長の林明基牧師による長老誓約、按手祈祷、宣布がなされ、名誉推戴は堂会長の鄭然元牧師が宣布した。

新型コロナウイルス感染予防のために参席人数の制限や防疫を徹底した上で行われたが、関西地方会の教会から大勢の方々が参席した。

この度、将立された黄文錫長老は1970年韓国で生まれ、2010年に渡日後、弁護士として日本で活躍し、2011年から大阪教会の執事として仕えた。

金恵栄長老は1955年故・金徳成牧師の末子として日本で生まれ、2005年から勧士として大阪教会に仕えながら保育園の園長として勤務している。

折尾教会　創立70周年記念礼拝挙行

コロナ禍の中、神の恵みに感謝

2020年６月21日（主）午前11時、折尾教会（西南地方会）にて主の導きと恵みにより創立70周年記念礼拝が行なわれた。

礼拝は、宋聖宰名誉長老の司会と開会祈祷で始められ、金承熙牧師（西部地方会所属）が、サムエル記上７章９～12節の御言葉をもって「今まで主は助けてくださった」という題目により説教した。福音の種が北九州市の折尾の地に蒔かれた折尾教会の前史から、これまで６名の担任牧師および５名の長老が将立され、今日まで歩んで来ることができたのは、主の深い憐れみとご計画によるものであると語った。

礼拝後、信徒一同70周年の感謝と喜びを分かち合った。

このような時期（新型コロナの影響下）においても、エベンエゼルの主は折尾教会の信徒たちを守り導いてくださった。まことに、主のご臨在と平安が共にあり、大変恵み深い一日であった。

（報告：姜富子）

韓日対照聖書販売

各ページ左に韓国語（改革改版）、右に日本語（新共同訳）が掲載されています。
●A5版変型・1772ページ
●価格：3,000円（消費税・送料込み）
※お求めは総会事務所へ

韓日対照讃頌歌販売

韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。
●B6版変型・1483ページ
●価格：2,500円（消費税・送料込み）
※お求めは総会事務所へ

讃頌歌委員会より「子どもさんびか」が発行されました。

主の祈り・使徒信条・交読文・十戒　集録
（いずれも韓国語・日本語）
一冊1,000円
お問い合わせは総会事務局へ
電話　03−3202−5398

豊かな味、豊かな心。
妻家房
SAIKABO
代表取締役　呉 永錫（東京希望キリスト教会 長老）
四谷本店：東京都新宿区四谷3-10-25 Tel. 03-3354-0100

特別寄稿　コロナ禍とノアの箱舟、そして「誠実」

金 性 済 牧師（日本キリスト教協議会 総幹事）

コロナ禍のまだ止まぬ中で、創世記６章から始まる「大洪水とノアの箱舟」の話を思い起こします。洪水が地上のすべてを呑み込む前に、人の罪が世界にあふれていたと聖書は指摘します（６章５節）。人間社会による乱開発によって、たとえば、コロナウイルスの元来の宿主と言われるコウモリをはじめ、棲み分けて相互に接触することのなかった動物同士が餌場を求めて互いの生息範囲を侵犯し合い、それによってウイルス感染が増加するようになったと、京都大学の山極寿一総長（霊長類研究の世界的権威）が指摘しています。人間が神の被造物としての生態系を壊しながら自然開発を推し進め、今日の、飽くことない快適と便利、そして利益を追い求める過剰物質文明を作り上げてきたことが、そもそも有害なウイルスが人間社会に襲い掛かるようになった背景であり、またコロナ禍の打撃で加速度的に深刻化する貧困・格差の問題とは本来、コロナ禍以前からの貪欲資本主義の抱える矛盾であったことを、私たちは考えさせられます。

コロナ禍は、キリスト教会にも大きな影響を与えてきました。今年３月以来、多くの教会が礼拝堂で今までのような礼拝をささげられなくなり、またいくつもの集いが取りやめになりました。これからもコロナ禍の第二波、第三波を予感する中で、このような困難な現実から私たちは未だ解放されていません。春には大切な聖餐式が多くの教会で中止されました。また、多くの教会でオンライン礼拝という方法が導入されました。このような事態が、これまで私たちが「キリストの体なる教会」（第１コリント12章）として、教会の交わりと奉仕において大切に守ってきた信仰生活、牧会、そして宣教に、これからどんな影響を及ぼしていくことになるのか、今私たちは答えきれないでしょう。しかし、私たちは今問いかけられています。そして、祈りつつ、問いつづけなければなりません。

ノアの箱舟の話で注目すべきことがあります。古代メソポタミアのギルガメシュ神話では、大洪水による死を免れるために人は箱舟をつくり終わると、洪水の起こる前に自分で扉を閉めます。しかし、ノアが箱舟をつくり終わったのち、その扉を閉めたのは、ノアではなく、主ご自身であったのです（７章16節）。洪水による破滅からいのちを守るために箱舟の扉を閉める権限はノアにではなく、それは神ご自身にあったからです。ノアの使命は、主が扉をお閉めになるまで、ひたすら出て行って、いのちに寄り添い、呼び集めることだったのです。このことは、この世界に遣わされた教会の存在理由について極めて大切なことを指し示しています。教会は、ノアに倣い、閉鎖的に閉じこもる群れであってはならず、また招き入れる人を人が選別してはならず、誰に対しても開かれた教会であることを教えられます。しかし一方、この度のコロナ感染がピークであったときに、治療にあたる医療従事者たちは医療施設の限界を抱え、“トゥリアージ”（限られた人工呼吸器を、誰から外し、誰につけるかのいのちの選別）の不条理という人間の究極的な倫理問題に苦悩したのです。果たしてキリスト教神学はその苦悩にどう寄り添えるのでしょうか。

コロナ禍が始まって、私たちがメディアを通して最も多く耳にし、目にした言葉が「ソーシャル・ディスタンシング（社会的距離をとる）」や「不要不急の外出を控える」、そして「三密を避ける」ということでした。そのために教会は、今はコロナ禍という「例外状況」なのだから、信徒の健康を守り、また教会が地域社会の中で感染源とならないためには仕方ないという理由から、教会の礼拝と交わりを大きく制約する対応をしてきました。

しかし、「例外状況」という理由さえあれば、私たちがこれまでしてきたことは間違っていなかったと断言できるのでしょうか。果たして、主ご自身がなさることと、主の宣教命令に従う人が担うべきこととについて私たちはどこまで正しく見極め、自分のなすべきことについて誠実であれたのだろうか…、聖書の御言葉を聴き直し、祈りをもって静かに自分を振り返らずにはおれません。

自分のようなものを罪の破滅の中から救い出してくださった主の愛に促されて、私たちはキリスト者として悲しみや苦悩の中にある隣人を訪ね、励まし、また招き入れ、歓待することを、主の恵みによる喜びとしてきました。そしてそのような信仰の証しに立ち教会の宣教がこれまで担われてきました。今私たちのその初心は大丈夫でしょうか。

コロナ禍が、いのちを脅かす感染や経済生活への打撃以上に、人の心に排他的な猜疑心と差別、そしてそれにおびえる恐怖という闇を人間社会に広げ、深めていったことをも、私たちは日本と世界の様々な事例を通して目撃してきました。また、パンデミックとなったコロナ禍を、人々は国境を越えて信頼し協力連帯して乗り越えなければならないのに、日韓関係であれ、米中関係であれ、むしろ世界がより排他的対立を深め、国際協力から一層遠のいていく暗い時代を、私たちは迎えています。そのような闇と隣り合わせで生きる私たちは、世に遣わされた教会として果たして主から託された、最も大切にすべきこと、すなわち「喜ぶ人と共に喜び、悲しむ人と共に悲しむ」（ローマ12章15節）愛の寄り添いと歓待の心をおろそかにせず、信仰と牧会、そして宣教の中で誠実に守れているのでしょうか。

コロナ禍が始まって、フランスのノーベル文学賞作家アルベール・カミュの小説『ペスト』が再び注目され、読まれるようになりました。その小説の終わりに、こんな言葉が記されています。

「問題は、誠実さ（honnêteté）ということです。こんな考えは笑われるかもしれないが、ペストと戦う唯一の方法は、誠実さです。」

このカミュが投げかけた「誠実さ」という言葉は、新約聖書においてただパウロの書簡にだけ３回用いられた言葉（“エイリクリネイア”第一コリント５章８節；第二コリント1章12節；２章17節）を手掛かりに旧約聖書にさかのぼると、ノアの「神に従う無垢(ターミーム)」(新共同訳６章９節)にたどり着きます。

ノアは大洪水に揺れる箱舟の中で、その天井につくられた明かり窓（６章16節）から神を仰ぎながら、自分は神の前で本当に無垢で誠実であっただろうか問いながら、洪水の止む日を待ち続けたと思います。それがノアの箱舟の信仰であったと言えます。

コロナ禍がもたらすウイルス感染と社会経済的な困難の大波に教会はこれからもしばらく耐え忍ばなければなりません。箱舟の中のノアが箱舟の外で何が起こりどうなるか見えなかったように、私たちは未だこの現実がいつ収束するか見えません。

しかし、洪水の最中も箱舟のノアを覚え見守られた（“ザーカル”８章１節）主は、今も私たちを確かに、そして誠実に見守っておられるのです。私たちはその主の真実（誠実）を信じるのです。その信仰と祈りの明かり窓を閉ざさず、自分の信仰と教会に託された主の使命に誠実であれることを願い求めましょう。そして、コロナ禍の洪水の彼方に主の指し示すいのちの港に必ずたどり着く希望を生きる信仰の道を進みつづけるものとなりましょう（詩編107：28－30）。